

平成 19 年度・第 5 回まちづくり講座 要旨

「やめられへんによ まちづくり～人とつながる楽しさと、人をつなげる方法 お話しましょ～」

日時：平成 20 年 1 月 29 日（火）、午後 7～9 時

場所：石神井公園区民交流センター

共催：東京建築士会練馬支部

NPO 法人練馬まちづくりの会

練馬区環境まちづくり事業本部都市整備部都市計画課

練馬まちづくりセンター

講師：野田奏栄氏

（社団法人大阪自然環境保全協会理事・株式会社都市文化研究所主任研究員）

講師略歴：

ハウスメーカー住宅設計部、都市計画および緑地計画・調査・設計コンサルタント事務所勤務を経て、現在は NPO メンバー・コンサルタント双方の立場から様々な市民参画による地域づくりに携わっている。

（一級建築士・技術士（都市および地方計画）・川西市まちづくりアドバイザー）

■ 第一部 事例紹介

はじめに、関西で専門家・コーディネーターとしてみどりや公園に関係するまちづくり活動に関わってこられた野田さんが携わっている 2 つのまちづくりの事例を紹介していただきました。

・「ぶらっと吹田～花と緑、水をめぐる遊歩道づくり」

「ぶらっと吹田～花と緑、水をめぐる遊歩道づくり」は、市が呼びかけて集まった市民の人たちが、まちを歩いて情報を収集してマップをつくり、また、そのマップをもとにガイドツアーを行っている。ガイドツアーの中では、ヒメボタルを守る会や、千里竹の会、紫金山を守る会などの他の市民団体に取り組み内容を紹介してもらったり、市立博物館に協力してもらって、かやぶき民家の見学を取り入れたり、視覚・聴覚障がい者のグループに協力してもらって障がい者に対応したガイドを実施したりと、他団体との連携を積極的に進めている。コーディネーター主導で始まった取り組みだが、コーディネーターは徐々に手を離して市民主体型へと発展している。

・「奥池公園ふれあい公園づくり」

「奥池公園ふれあい公園づくり」では、奥池公園のあり方を様々な世代や組織の代表が集まって一緒に考えて提案し、実際に公園を作るところまで行っている。この取り組みでは、行政の福祉政策課や都市計画、水・みどり推進課など様々な部署が庁内横断的に連携した

がら団体をバックアップしている。今後は様々なグループをコーディネートする組織に向けて、新たな展開を目指している。

■第二部 野田さんとセンター職員・山田との対談

続く第二部では、センターの山田が野田さんに質問をぶつけながら、まちづくり活動の実際やうまく進めていくために大事なことなどをお話していただきました。(センターの山田は講師の野田さんと神戸のまちのデザインを考える企画で初めてお会いして以来、まちづくり活動を一緒にさせていただいたご縁があることから、今回、センターの山田と野田さんとの対談という形で進めることにしました。)

◆山田：二つの事例で苦労した点は？

■野田：

ぶらっと吹田では、ガイドツアーには積極的なメンバーは多いが、事務作業をするメンバーがないことが課題。行政主導ではじめたので、これまで行政が行っていた記録などの事務的作業を市民に引き継ぐのが難しい。

奥池公園については、ピラミッド型のまちの自治組織ができており、世代間で意見が食い違っていることが課題だった。自治会のおじいさんたちと PTA のお母さんたちの間で、取り組みの進め方やグループの位置付けの認識などについて共通理解が得られない状況だった。そこで、アドバイザーとして派遣されている私たちスタッフは、コーディネートの立場から、専門家としての公園デザイン監修や、広報の手法などのアドバイスの場を活かし両者の間で意思疎通の機会を持つお手伝いを粘り強くすすめた。世代間で考え方が違うのは仕方ないが、当事者がお互いの考え方を理解しようという歩み寄りの姿勢をもたないとメンバーが活動から離れていくことになってしまう。

◆山田：そのような課題がある中で、野田さんはコーディネーターとして両者の間に立ち、活動をサポートして来られたかと思うが、コーディネーターは必要なのか？ コーディネーターの役割とはどのようなものか？

■野田：

大阪市内だと下町っぽいので、面と向かって文句を言う人が多い。おばちゃん、おじちゃんたちが、うまく役割分担していて、頑固なおじさんもいれば、ほわっとしたおじさんもいて、「あんたそんなこといいますけど、まあまあ」っていう人もいたり、「ははは」と笑って受け流すお婆さんもいたり、そんな雰囲気でもなんとかうまくコミュニケーションが出来てまとまっていく。一方、ニュータウンでは、なかなかそういうコミュニケーションとは、ならない。ピラミッド型の自治組織や会社でやってきたおじいさんたちは、「今までこういうやり方でやってきたのだから、そのやり方が当然と思いこんでいたりする。お母さんたちは、親世代を立てつつも意見が違い、どうしたらよいか悩まれる。そうした中で、

コーディネーターの役割は、そうした両者の悩み相談係の役割が大きかった。行政には言いにくいことも聞かせてもらっていた。

このプロジェクトでは、広報に力を入れている。地域の人たちに、一部の人たちが勝手にやっていると思われることは良くない。そうならないためには、「誰でもいつでも来てください」と言い続けることが重要である。人に分かってもらう資料を作って、決まったことは必ず全戸配布で伝えるようにしている。コーディネーターは、そうした資料作りや配布などの技術的な指導を行うことも大事だと思っている。

◆山田：コーディネーターが手を離して活動グループが徐々に自立していくためには？

■野田：

コーディネーターが初めからあんまり手をだしすぎると、市民に仕事を引き継いでいくことが難しくなるので、始めから手を出し過ぎないことが大事と感じている。たとえば、たたき台は作るが、自分たちでたたき台をもとに修正して決定案を作ってもらおうということが大事であり、いかにサポートするかを意識している。

広報紙も、パソコンで作らないといけないと思っている人が多いが、手書きでもいいので、地域の人たちが自分たちの手で作っていくことが大事。メンバーの人たちの力を最大限発揮してもらおう。活動している人たちに、「こんなんでも恥ずかしいわ（＝力不足）」と思わせないことが大事だろう。

◆山田：コーディネーターの存在がなく、自分たちだけでがんばっている団体が、もういやだと思わずに楽しく続けていくために必要なことは？

■野田：私が活動しているメンバーの一人の場合、何を言われたら嫌かって考えると、できん事を言われたら嫌、強制されると嫌になると思う。リーダーがしっかりしているのはいいが、リーダーが他のメンバーに、あれこれと指示するようになるとグループはうまくいなくなる。メンバーの中に色々な人がいて、引っ張っていく人もいれば、それをふにゃふにゃと緩めて言える人、粛々・コツコツとする人などがいて、そうしたメンバーの人たちがうまく役割分担できるようになると、対立せずにうまくいく。広げていくのが得意な営業肌の人、最後まで責任もって成し遂げる人など、それぞれの得意分野を生かして活動に参加できるようにすることが大切だと感じている。

記録が一番難しいところ。こつこつと記録をとることは大事。前の話し合いの記録があると、次の話し合いの時には記録を見て積み上げ式に話ができる。記録がないと何度も議論が前に戻りがちである。記録がないと他の人に伝えることもできない。具体的な行動には熱心な人が多いが、記録する人がなかなか出てこないことが課題と言える。

◆山田：デザインや広報が得意な人がいれば、人材を共有するなど、グループ間で助け合うことが重要か？グループ間で連携していく上での課題は？

■野田：

広報に関しては人材の共有は難しいかもしれない。共有するには、活動を一緒にやっ
ていかないといけない。活動の連携を深める方法が必要になる。

ただ同じ分野の人と連携しても、不得手なところは、不得手なままでとどまってしまう
ようにも思う。違う分野と協働すると、違うことが得意であったり、違う人脈をもってい
たりするので、次の展開が見えてきやすいかもしれない。

また、人材の引継ぎが難しい。70代と団塊の世代である60代でも、10歳の年の差でか
なりの違いがある。60代の人たちは、70代の人たちに指示されるのではないかと、思って
一緒にやっっていく上で身構えてしまうという声も聞かれる。50代・60代ではパソコンを使
える人が多いが、70代は使える人が少ないといった違いも、引継ぎ（や情報共有）を難し
くしている点のようだ。

淀川の事例では、集まっている人たちの共通点は、みんな淀川をどうにかしたいと思っ
ているという点だけであり、活動メンバーは、コミュニティ誌を出している人、鳥ばっ
かり見続けている人など様々である。色々な人が集まってグループを立ち上げると、最初
は、認識の違い、立場の違いが出てきて、ばらばらになるが、徐々に理解できる部分や共
有できる部分を探っていくことになる。そうした立場の違いを認識しながら、理解できる
部分を探るといった点が、グループ間の連携でも鍵となるのではないかと思っている。

■第三部 参加者との質疑応答

第三部では、第一部の事例紹介と第二部の対談を受けて、参加者の方々に講師に聞きたい
ことを挙げてもらい、それらの質問に対して野田さんに答えていただく形で進めました。

◆参加者：「ぶらっと吹田」のマップづくりで苦労したこと、工夫したことは？ メンバー
は何人？ 費用はいくら？

■野田：予算が少ないことがしんどかった。公開するものだったので、マップに載せても
問題ない道かどうかを慎重に精査した。デザインは、アナログでつくすることで、かえって
わかりやすくなった。

メンバーは、市民が約20名、私たちスタッフ6名、行政10名ぐらいで構成されている。
そのほか、調査だけ手伝ってくれた人もいる。全部足していくと50人ぐらい。

費用はほんとに少なかった。私たちスタッフも、半分は自分たちの活動の気持ちでやっ
ているので、労働を無償提供した部分も大きい。大学の先生や学生さんにも協力してもら
った。

◆参加者：住宅地を見知らぬ人が歩くことへの地域住民からの抵抗はなかったか？

■野田：昔の里道は掲載する際は気をつけないといけない。また、ガイドツアーでは、地

域住民から苦情を受けたこともある。不特定の大勢の人を連れて歩くときは、「吸殻は捨てないで」など、それぐらいは当たり前と思うことでも、事前に注意事項として参加者に周知することが大事である。

◆参加者：メンバーを引き込む方法は？ たとえば、メンバーが各自最低一人を引っ張ってくるなどの方法か？

■野田：メンバーの友達を引き込んでいくのも大事。引き込んだあとに、その人をどうやってその活動の中で役割を持たせてはませるかが重要となる。

◆参加者：若い人を引き込むには？

■野田；

普段から問題意識をもっている人に情報を伝えると、来てくれることが多い。最近は環境に興味を持っている若い人も多いのでは。そういう人たちに伝えていくといいのでは。

今回紹介した事例にかかわらず、できるだけ大学と連携している。大学生であれば、子供相手のイベントなどを手伝ってくれることもある。しかし、学生個人や先生個人とのつながりであれば、学生が卒業したり先生がいなくなったりすると続かないことがある。継続的に学生に関わってもらうには、大学のカリキュラムに活動への参加を組み込むことができるといい。

若いお母さんたちはすごいネットワークができていますので、PTA などのつながりで若いお母さんたちを呼び込むことも可能ではないか。

一方で、若いお父さんたちに参加してもらうことはなかなか難しい。下町だと自営業の方が多く、地域にいる時間が長く、少しであっても協力してくれたりする。経験からいうと、例えば兵庫県の赤穂市のように、おまつりを通じて地域連携ができていて、お父さんががんばる気風が強い地域もある。

◆参加者（若い男性）：自治会、社会教育団体に関わっている。生涯学習セミナーを開催しており、赤ちゃんから80代、90代のお年寄りまで参加されている。また、地域の方も含めて緑化や清掃活動を行っている。

■野田：清掃活動はさまざまな場所で行われていてそのパワーはすごいと感じている。その清掃活動から他の活動へとどう展開していくかが課題。たとえば、釣りをする人たちが清掃活動や外来種駆除活動などをがんばって行っている。また、自然環境保全に関わって観察会などの活動は始まりやすいが、そこから新しいまちづくり活動にはなかなか展開しにくいように感じる。団体のメンバーが自分たちのやり方や考え方ですすめ、気の合う人たちだけが残って、「合わなくなったら、しゃあないわ」と簡単にあきらめてしまうというケースもみられる。一方で、吹田のように、活動の枠を越えて様々な考え方の団体がネットワークを広げているところもある。全く異なる主体が集まって、違う人の考えを知り、

何が違うのか、違いを乗り越えるのにどうしたらよいか、というしんどいところと向き合わない、まちづくりにはつながらない。その機会をつくるのがコーディネーターの大きな役割かと思っている。

◆参加者：私たちは、教育、まち環境、自然、ごみ資源、など、異なる活動をしている人間が集まって連絡会をつくり、協力しながら進めている。吹田の事例を聞いて、吹田のようにさらにネットワークを広げていきたいと思った。企業と連携できれば、お金の面も解決できると思っているが、企業と連携するにはどうすればよいか？

■野田：企業の敷地の緑化などでは市民と企業との連携ができつつあるが、まちづくり活動へとどう発展させていくかが難しい。

◆参加者：石神井公園では様々なグループが活動しているが、今後公園の再生を考えていくためには？

■野田：石神井公園づくりワークショップなどを提案して、関心のある方たちが集まって話をしたらどうか。専門家からアドバイスを聞きながら、何が議論の焦点かを定めて話すといいのでは。

◆参加者：私たちの団体は緑道の提案を行いたいと思っているのだが、緑道周辺の地域の人の意見を集めるにはどうしたらいいか？

■野田：関係する自治会、町内会の全戸に周知する方法をとるといい。個人だと難しいが、できれば公的な立場で、町内会の全戸に回覧などで呼びかけて集会を開き、賛成派なり、反対派なりの意見を集約して、町内会としての総意を明らかにする。そうした過程も公表していく。そのような形で町内会を巻き込むといいのでは。

◆参加者：どういった方がキーマンになる？

■講師：活動にもよって異なってくる。しかし、子供の役割は大きいのではないかな。

◆参加者：私たちの団体では、会議の際にホワイトボードに要点を書いて記録しているが？

■野田：ホワイトボードに記録されているというのは、しっかりされている方だと思う。高齢の方は、記憶が年々定かでなくなっておられる場合もあり、議論が逆戻りしてしまうことも多いので、記録を目に見える形で残すことは、非常に大事なことである。また、同じ場所で同じ言葉の話していても、人によって認識が違うこともある。何かを決めるときは、ファシリテートしている人が「こうですね」と確認を取って、みんなが「うん」と納得しながら進めていくことが大事になる。みんな理解しているはずという思い込みで進んでいくと、あとで違っていたとなったりするので危険である。言葉は、世代間でも、男女間でも違ってくるので、お互い思いやって接することが大事だろう。

◆参加者；マップに道が掲載されて、そこを不特定多数の人たちが歩くことで、逆に環境を壊したり、地域の良さをなくしてしまうことにつながらないか？

■野田：そういう道については、敢えて公開しないこともある。特に古くからの集落地では歩いて問題ないと判断した道だけをマップに記すように気を遣っている。

◆参加者：練馬のまちのよさを歩くことで探していきたい

■野田：本気で歩いて、マップを作れば、まちの将来を提案する素材にもなる。まずはまちの状況を把握していくことが、何か行動していく上でのきっかけとしてはいいと思うので、様々なところでまち歩きを展開してほしい。歩くことがきっかけで開発が止まったとか、計画が変わったということもある。ただ多くの人がまちを歩くということだけでも、非常に大きな力になると感じる。

◆司会・山田：まちづくり活動をやっていて良かったと思うのはどのような時ですか？また、皆さんに対するメッセージをお願いします。

■野田：

活動をやっていて良かったと思うのは、「分かり合えないと思っていた人と分かり合える瞬間がある日突然やってきた」、とか、「一人ではどうがんばってもできないことが何か一つ進んだ」と実感できたとき。ただし何か一つ進んだと実感するまで何年もかかるとしんどい。何年も何も手応えがないまま進んでいると面白くなってやめたくなるのではないかな。1年の間にここまではどうにか形にしよう、作り上げようという思いをメンバー間で共有していけるといい。

たとえば、グループの仲間同士でけんかしていたとしても、通りすがりの人が「いい公園やねー」といってくれれば、もうちょっとがんばろうと思うものではないか。だからそういう外からの反応をもらうためには、ちょっとでも外にアピールする、一つでも何かを決める、作り上げる、そういう些細なことの積み重ねが重要だと思う。

活動の中で、できないこととか、しんどいことを、「相手がやってくれへん」「何でせーへんの」などと文句を言うのでなくて、その人にできること、自分にできることを探す。相手ができないことを追い求めないこと。「Win-Winの関係」という言葉が最近使われるが、片方が負担に思っていたらだめ、あなたも楽しい、私も楽しい、お互いにそういう関係をまちづくり活動の中でつくろうという思いやりが大事になってくる。

(以上 文責：練馬まちづくりセンター)